

戦中戦後のジャーナリズム覚書

—検閲と自主規制と

高橋新太郎

神奈川県特高警察と横浜地檢思想検事の予見によって増殖・

フレームアップされ、五十名近くの研究者や編集者などが治安維持法違反容疑によつて、昭和十七年九月から二十年五月にかけて次々に検挙され、獄死及び敗戦による釈放後間もなくの病死者を含めて八名もの犠牲者を出した複数多岐にわたる思想・言論の弾圧事件を一般に「横浜事件」の名で総称する。この事件の一つの端緒となつたのが昭和十七年八月号九月号の『改造』に分載された細川嘉六の「世界史の動向と日本」と題する巻頭論文であった。当時のこの種総合雑誌の慣行として、細川の一文も事前に内閣情報局の検閲官の内閣を経て発刊されたものであったが、日本出版文化協会の機関紙『日本読書新聞』九月十四日号に発表された陸軍報道部長谷萩那華雄大佐の「戦争と読書」と題する時局談の中で細川論文にふれ、巧妙に偽装された共産主義の宣伝であるとして、検閲の不徹底を言撃げした。このクレームに慌てた内務省は、早速『改造』該当号をあらためて発売禁止処分に付し、加えて細川を治安維持法違反容疑で

逮捕した。

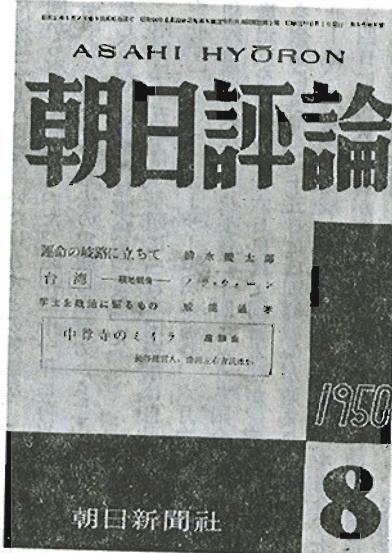
内検閲をした主務官庁の内閣情報局検閲課は、発売され、ほぼ品切れる程の時の経過の後、異議を唱えることなく、軍の、というよりは陸軍の意向そのままに後追い処分をしたのである。翌年から、細川と関わった『改造』『中央公論』『日本評論』等の編集者が次々と検閲されてゆく。そういう最中に、大日本言論報国会常務理事野村重臣の『出版事業整備と綜合雑誌批判』(『讀書人』昭和十九年二月号)が発表される。野村は文中にい、『中央公論』『改造』の二誌は、かくの如く総合雑誌としての歴史は古いため、その内容の伝統は必ずしも古いといふことを得ない。若しそれ大正六年より昭和十二、三年に至る二誌の伝統が、今日なほ維持されてゐたとするならば、二誌は譲りなく廃刊さるべきものである。即ち、『改造』は昭和八年八月号に掲載された細川嘉六の「世界史の動向と日本」と言ふソ連礼讃論が問題となって、編輯スタッフを交替し、儻に新発足を許された新雑誌である。又『中央公論』は屢々掲載された京都学

派の諸君の反國体的、反軍的、敗戦的評論が物議を醸し、更に昨年一月号以来、連載された谷崎潤一郎氏の頽廃小説『細雪』が非難を受けて掲載中止となり、次で掲載された岸田国士氏の反軍脚本『かへらじと』が問題となって、軍の指揮を受け、七月号を休刊し、八月号以来、再出発した三号雑誌なのである。……その古き伝統は日本が絶対に許容し得ない敵性思想——民主主義、國際主義、共産主義——の第五列的宣伝雑誌であったと言ふ甚だ香しからぬ伝統である」と糾弾した。中央公論社と改進社が、情報局から自發的廃業を名とする解散を申し渡されたのは、一九年七月十日のことであった。「戦時下、国民の思想指導上許しがたい事実がある」というのがその理由であった。かくて『改造』は六月号、『中央公論』は七月号をもつて廃刊となつた。『中央公論』最終号(第五十九卷七号)を飾つた文芸作品は、土屋文明の「南瓜と旋盤」と題した短歌七首と、加藤樹邨の「胸火」と題した俳句七句であった。

朝風に南瓜の広葉ひるがへり白斑かがやく六月二十日

吾が家に最も幼き少女汝立ちて日々旋盤にはげむ

古人蒼天に訴へきわれ等冬の石に



検閲は無名の小冊子にまで及び、徹底的に行われたのである。

占領軍の検閲は段階的に緩和されてゆくが、朝鮮戦争によつてまた強化されたのである。その一例として朝日新聞社発行の月刊誌『朝日評論』について記す。昭和二十一年三月創刊の、総合雑誌、文化雑誌ともいえるもので、大仏次郎『地獄』岩杉太率治の遺稿「グッドバイ」などの創作も発表された。

昭和二十二年十五日以後、極右・極左および影響力大とされる「エデンの海」船山馨「半獸神」木下順二「三星製太郎」、太宰治の遺稿「グッドバイ」などの創作も発表された。

昭和二十二年五月以後、極右・極左および影響力大とされ



た雑誌二十八種を除いたほとんどの雑誌が、これまでの事前検閲から事後検閲となつた。昭和二十一年に再出発した『改造』『中央公論』は、過去の実績と影響力から二十八誌の仲間入りをし、『朝日評論』は事後組であった。

昭和二十五年は、年頭に「日本国憲法は自己防衛の権利を否定せず」とのマンカーサー声明があり、六月六日には、吉田首相宛書簡で共産党中央委員二十四名（うち国會議員七名）の公職追放を指令し、十六日には、國警本部が、デモ・集会の禁止を全国に指令、二十五日には朝鮮戦争が始まり、翌日マンカーサーは、共産党機關紙『アカハタ』の発行停止を指令、七月二十四日には、GHQが新聞協会に、共産党員と同調者の追放を勧告し、以後、新聞・通信・放送機関にはじまり、民間産業・政府機関・教職員にまで及んだいわゆるヘレンド・ページの嵐が吹き荒れた年であった。

『朝日評論』七月号は、ハロルド・ラスキーの「第三次大戦は不可避免」を巻頭に、田中慎次郎の「冷戦と日本」、南原繁の「政治と学問」、上原專禄の「政治に対する学者の発言」、ジョセフ・フロムの「日本・アメリカにとっての高価な軍事基地」、デニス・ウォーナーの「極東コミンフォルム」は指令するなどの論文を柱とした編集であつた。そして八月号は、掲出の目次写真にあるように、冒頭の清水幾太郎「運命の岐路に立ちて」、戒能通孝「学生を政治に驅るもの」の二論文と中尊寺のミイラ「座談会」を中心とした号であつたが、七月下旬にそれが刷了となつた段階で、GHQ民間情報教育局から呼び出

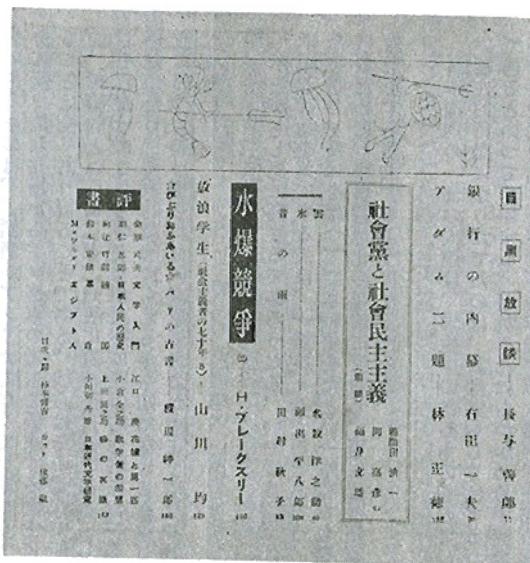
通告注意したという。そして、論文のどの点がプレスコード違反になるかについては、ノーコメントであった。

田中慎次郎は、当時朝日新聞東京本社調査研究室長をつとめる定連の論客であり、論旨は、対日投資その他、米国の援助を求める声が大きいが、日本が米国に求めるべきはドルよりも大きな「世界の平和」であり、米・ソその他の大国に対して、冷戦に代わる平和的竞争を求めたものであつた。

編集部としては、田中論文にプレスコード違反の断が下されたとなれば、刷り上がつた八月号の清水・戒能の二論文も当然CIEの忌諱に触れるを得ないと判断から、急遽発売中止の措置をとり、次号を八・九月合併号として編集することで打開を図つた。編集部が顧慮せざるを得なかつたのは、清水論文の次の部分であつたろう。

マルクス主義の学説を奉ずる人々が民衆の生活について最も切実な关心と同情とを有しているという、この誠に單純な事実を指摘せざるを得ないのだ。私は、彼等の関心や同情が十分であるとは思はない。政治的に活動した場合、完全に民主主義の原理を守つて来たとも信じない。弁護の余地のない事例さえ数えきれない。併し、それにも拘らず、他の何者が彼等以上に日本の民衆の苦惱について率直な関心と同情とを示して來たであろうか。……

民衆の生活への理解と愛情とは、一切の思想に生命を与える塩である。私はマルクス主義を奉ずる共産党に対しても多くの不満と批評とを持つている。だが同時に、最も多くの塩がそこにあることは依然として眞実である。



若し共産党が公式に或は事実上、非合法化せられるならば、やがて他の凡ての政党も壇を失うであろう。社会科学の面で、この学説に対する禁圧が結局社会の科学的研究に対する禁圧になると同様に、凡て多少とも壇を含むものは、共産党との混同を恐れて、力めてこれを隠すように、事実、これを失うようになるであろう。見捨てられるものは日本の民衆である。

同じく戒能論文の

……現在共産党すらをも手こすらせているこれらの学生のあるものは、占領者がアメリカでなくしてソ連なら、十分に反ソ的な立場から、ソ連軍の撤退を要求する闘士に変ることは全くあり得ることである。彼らはその意味で組織的、理論的というよりも、一般に直情徑行的である。しかしそれだけにこれらの人々が次第に狂信的性格をおびるにいたつたり、特攻的氣魄にもえるかも知れないことは、正直にいつて避け得られない現象であるかのように思われてならない。

不安がもし更に高まるであろうなら、いわゆる「極左的」学生と行動を共にする人は、一層益々ふえるであろう。生命を踏し、身体をはつてでも戦争をたどり一時間でも遠ざけるために、軍事基地化の懇請に反対し、更には占領軍の撤退をすら要求するようになるだろう。

日本国内の一部の人達は、学生中のあるものをしてひどい極左的行動にかりたてたのは、共産党もしくはアカハタであるといつて非難する。だがそれにもかかわらず実際には、共産党や「アカハタ」を非難する人達が、一部の学生

諸君をかりたてて、お尻に火をつける役を演じているのである。極左的学生と呼ばれている人々は、理論的には資本主義のいきづまりが冒險的な戦争に導くであろうことを信じているが、彼らをしてこのような信念をもたせるようになつたのは、實に無責任な政治家その他の偉い人の放言と、誠しやかな誇張された新聞報道だつたのである。……

という戒能論文の発言は、先に略記した当代の政治状況の中で、とりわけインボデン新聞課長を強く刺戟するものであったろう。

結局、八月号掲載文で次の八月・九月号に生かされたのは、ウォーンの「台灣」、勝間田清一らの鼎談「社会党と社会民主主義」中尊寺学術調査団の座談会、連載のブレークリスリー「水爆競争」・山川均「社会主義者の七十年」、渡辺紳一郎の「パリの古書」で、書評欄も、桑原武夫「文学入門」・ワルタリ「エジプト人」のほかは、すべて没となつた。

『朝日評論』は、昭和二十五年十二月号の巻末に「休刊の言葉」を載せて通巻五十八号の幕を閉じる。そこには、「出版界諸般の事情が最も困難を極めた時期」に発刊され、「多少の起伏はあつたにしても、終始、茨の途であった」との語もある。巷間、八月・九月号の合併ある故に、全五十七冊をもつて正しいとする向もあるが、占領軍の恫喝的警告によって、あえて自主規制せざるを得ず発売を見送り、内部配付のみで一般に流布しなかつた八月号を認知し、全五十八冊とすべきものと私は考える。

『朝日評論』は、昭和二十五年十二月号の巻末に「休刊の言葉」を載せて通巻五十八号の幕を閉じる。そこには、「出版界諸般の事情が最も困難を極めた時期」に発刊され、「多少の起伏はあつたにしても、終始、茨の途であった」との語もある。巷間、八月・九月号の合併ある故に、全五十七冊をもつて正しいとする向もあるが、占領軍の恫喝的警告によって、あえて自主規制せざるを得ず発売を見送り、内部配付のみで一般に流布しなかつた八月号を認知し、全五十八冊とすべきものと私は考える。

『朝日評論』は、昭和二十五年十二月号の巻末に「休刊の言葉」を載せて通巻五十八号の幕を閉じる。そこには、「出版界諸般の事情が最も困難を極めた時期」に発刊され、「多少の起伏はあつたにしても、終始、茨の途であった」との語もある。巷間、八月・九月号の合併ある故に、全五十七冊をもつて正しいとする向もあるが、占領軍の恫喝的警告によって、あえて自主規制せざるを得ず発売を見送り、内部配付のみで一般に流布しなかつた八月号を認知し、全五十八冊とすべきものと私は考える。

この章は、朝日新聞東京本社史編修室宇野博氏の格別

御厚意を得て成った。掲出の誌影と目次写真も同氏所蔵のものによつた。仲介の労をおとり頂いた朝日新聞社友奥野保男氏共々、誌面をかりて厚く御礼申し上げる。

この章は、朝日新聞東京本社史編修室宇野博氏の格別

分なりに概括する作業を始めることとした。従来の「三好十郎」に加えての二本立てであるが、着手すべき時機と思いました。私なりの未完の戦後に續着をつけようとの志意である。

久松潛一・木俣修・成瀬正勝・川副国基・長谷川泉編修の『現代日本文学大年表』(明治書院)で「評論・隨筆」と「事項」欄を担当したが、「明治篇」・「大正篇」・「昭和篇I」(「事項」欄鈴木晴夫担当)三巻を出して十数年を経た。「昭和篇II」は戦後篇であるが、中絶のまま、今日に至つてしまつた。この責も果さねばならぬと私に考へてゐる。

かれ主義が弥漫するマスコミ界に、各種勢力・スポンサーの圧力を受けた言論・表現のへ自主規制へ自己検閲へが、一般読視聽者の耳目の及ばぬところで着々と強化されている。昭和天皇不例の際にも、その事を感じざるを得なかつた。

十年近く前に、敗戦を軸として、激しく振幅する極めて政治的な時代の文学的営為を概括した小文「戦中から戦後へ」「戦後の文学」(浅井清・吉田燕生・外編『研究資料現代日本文学②』明治書院刊)の末尾で「戦後初期の文学の動向をこと細かに探ろうとするには、絞出したこれら雑誌文献を無視することはできないが、これをふまえた戦後文学史は未だない。」など、いささか気張つて書いたが、ブランゲ文庫を筆頭として、他の文庫も整備補充され、敗戦前後の基礎資料の活用も背程困難ではなくつた。明仁天皇が朝見の儀に憲法の遵守を誓つた平成時代を迎えて、魄より始めよではないが、戦中から戦後への緊張をはらんだ連続と断絶の相を文献的に跡づけ、自